

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。
Copyrighted materials of the authors.

「アフリカ諸語における声調・アクセントの総合的研究」(平成30年度第2回研究会)

日時：平成30年10月20日(土曜日)午後1時30分より午後5時半

場所：AA研302室

出席：梶、品川、阿部、若狭、安部、角谷、塩田、高村、古閑

報告タイトルと報告者氏名・所属

1. 「ウォライタ語普通名詞のアクセント」
若狭基道 AA 研共同研究員(明星大学)
2. 「マア語の名詞のトーンについて」
安部 麻矢 AA 研共同研究員(大阪大学)

1. 「マア語の名詞のトーンについて」
安部 麻矢 AA 研共同研究員(大阪大学)

タンザニアの北東部の西ウサンバラ山地で話されているマア語のトーンについて観察を行った。マア語には二つの変種がみとめられ、このうちの内マア語は言語接触により成立したといわれており、非バントゥ系の語彙がみられる。

先行研究では、主に形態・統語の面で内マア語と外マア語の構造の比較が行われてきたが(Mous 1994, 2003, 安部 2016 など)、トーンに関するものは全くない。そこで、本発表では、マア語の名詞のトーンについて、内マア語のパターンと外マア語のパターンとに分けて分析し、報告を行った。

マア語においては、トーンは高(H)と低(L)の対立である。TBUは音節で、Contour toneはない。マア語の名詞は、名詞接頭辞と語幹から成る。それぞれのクラスの名詞接頭辞はすべてLであられる。ただし、母音を持たない9/10クラスの名詞接頭辞Nは固有のトーンを持たない。このことは、語幹の初頭音節のトーンがHでもLでもあられることから確認できる。

名詞のトーンは名詞が独立してあられるときも、名詞句を形成するときの前部要素や後部要素でも、また文中のどこにあられるときでも変化がない。

名詞のトーンパターンについては、以下のように観察される。

語幹が1音節 H、L

語幹が2音節 HH、HL、LH、LL

語幹が3音節 HHH、HHL、HLL、LLH、LHL、LLL

語幹が4音節 HHHH、HHHL、LHHL、LLLL

2. 「ウォライタ語普通名詞のアクセント」

若狭基道 AA 研共同研究員(明星大学)

1. はじめに

ウォライタ語はエチオピアの西南部で話されている、アフロアジア大語族のオモ系の言語である。

本発表では現地で採用されている書記法に従う。それによるとこの言語の音素は、p~f(自由変異)、t、k、' [ʔ]、s、sh [ʃ]、h、nh [h̃]、ch [tʃ]、b、d、g、z、zh [ʒ]、j [dʒ]、m、n、r [ɾ]、l、w、y [j]、ph [pʰ]、x [tʰ]、q [kʰ]、c [tʃʰ]、dh [dʰ]、l' [lʰ]、m' [mʰ]、n' [nʰ]、i、e、a、o、uである。大半の子音は重化し得る。2つの母音が結合されて長母音、二重母音を形成し得る。尚、二重母音は ay、awu 等と接近音を表す文字を利用して表記される。

この言語は高低アクセントによる対立が存在する。これは、maat-áa「草-M.A.SG.ABS」、

máát-aa「権利-M.A.SG.ABS」のようなミニマルペアが存在することからして明らかである。普通名詞に関してこのアクセントに関する現象を考察するのが本発表の目的である。

この言語の普通名詞は（その他の多くの品詞もだが）、「語彙的な語幹+文法的な語尾」という構造を有している。語幹、語尾、共に更なる分析が可能な場合もある。

2. 普通名詞単独でのアクセント

Wakasa (2008)では tone という用語を使ったが、語アクセントと解した方が良いと思われる。即ちこの言語では、「それぞれの語において際立たせて発音されるところが決まって」おり、「単語の中のどこか1箇所を際立たせる」という現象が見られる。「各音節が」「用意されている高さのパターンの中からどれか1つを選ぶというタイプ」ではない（引用は斎藤(2015: 3)）。

普通名詞は4つの活用クラス（3つの男性クラスと1つの女性クラス）に分かれ、それぞれが非具体形、単数具体形、複数具体形の3系列を有し、それぞれの系列が5つの格（ABS 絶対格、OBL 斜格、NOM 主格、INTER 疑問格、VOC 呼格）に従って語形変化をするのが原則である。

アクセントを考慮すると、これが更に大きく2つのクラスに分かれる。その語尾を示すと以下のようなになる。高く発音される箇所を´で示す。

(2-1) 普通名詞 アクセントクラス I の語尾

男性クラス A

	ABS	OBL	NOM	INTER	VOC
非具体形	-á	-á	-í	-ée	´-oo
単数具体形	-áa	-áa	-áy	-áy	-áwu
複数具体形	-atá	-atú	-atí	-atée	-átoo

男性クラス E

	ABS	OBL	NOM	INTER	VOC
非具体形	-é	-é	-ée	-ée	´-oo, ´-ee
単数具体形	-íya	-íya	-ée	-ée	-íyawu
複数具体形	-etá	-etú	-etí	-etée	-étoo

男性クラス O

	ABS	OBL	NOM	INTER	VOC
非具体形	-ó	-é	-óy	-óo	´-oo
単数具体形	-úwa	-úwa	-óy	-óy	-úwawu
複数具体形	-otá	-otú	-otí	-otée	-ótoo

女性

	ABS	OBL	NOM	INTER	VOC
非具体形	-ó	-é, -í	-á	-óo	´-oo
単数具体形	-íyo	-ée	-íya	-íi	-ée
複数具体形	-etá	-etú	-etí	-etée	-étoo
	-otá	-otú	-otí	-otée	-ótoo

(2-2) 具体例

男性クラス A 「犬」

非具体形	kan-á, kan-á, kan-í, kan-ée, kán-oo
単数具体形	kan-áa, kan-áa, kan-áy, kan-áy, kan-áwu
複数具体形	kan-atá, kan-atú, kan-atí, kan-atée, kan-átoo

男性クラス E 「驢馬」

非具体形 har-é, har-é, har-ée, har-ée, hár-oo / hár-ee

単数具体形 har-íya, har-íya, har-ée, har-ée, har-íyawu

複数具体形 har-etá, har-etú, har-etí, har-etée, har-étoo

(2-3) 普通名詞 アクセントクラス II の語尾

男性クラス A

	ABS	OBL	NOM	INTER	VOC
非具体形	'-a	'-a	'-í'	-ee	'-oo
単数具体形	'-aa	'-aa	'-ay	'-ay	'-awu
複数具体形	'-ata	'-atu	'-ati	'-atee	'-atoo

男性クラス E

	ABS	OBL	NOM	INTER	VOC
非具体形	'-e	'-e	'-ée	'-ee	'-oo, '-ee
単数具体形	'-iya	'-iya	'-ee	'-ee	'-iyawu
複数具体形	'-eta	'-etu	'-eti	'-etee	'-etoo

男性クラス O

	ABS	OBL	NOM	INTER	VOC
非具体形	'-o	'-o	'-óy	'-oo	'-oo
単数具体形	'-uwa	'-uwa	'-oy	'-oy	'-uwawu
複数具体形	'-ota	'-otu	'-oti	'-otee	'-otoo

女性

	ABS	OBL	NOM	INTER	VOC
非具体形	'-o	'-e, '-i	'-á	'-oo	'-oo
単数具体形	'-iyo	'-ee	'-iya	'-ii	'-ee
複数具体形	'-eta	'-etu	'-eti	'-etee	'-etoo
	'-ota	'-otu	'-oti	'-otee	'-otoo

(2-4) 具体例

男性クラス O 「鶏」

非具体形 kútt-o, kútt-o, kútt-óy, kútt-oo, kútt-oo

単数具体形 kútt-uwa, kútt-uwa, kútt-oy, kútt-oy, kútt-uwawu

複数具体形 kútt-ota, kútt-otu, kútt-oti, kútt-otee, kútt-otoo

女性 「妻」

非具体形 máchch-o, máchch-e/ máchch-i, máchch-á, máchch-oo, máchch-oo

単数具体形 máchch-iyo, máchch-ee, máchch-iya, máchch-ii, máchch-ee

複数具体形 máchch-eta, máchch-etu, máchch-eti, máchch-etee, máchch-etoo

máchch-ota, máchch-otu, máchch-oti, máchch-otee, máchch-otoo

2.1. アクセントクラス I

このクラスでは、H アクセントが原則として語尾に、正確には語幹末子音とそれに後続して名詞の性・クラスを表す短母音から成る部分にある。その際の「アクセントを担う単位」であるが、H アクセントが語尾にある場合、それは多くの場合、音節ではなく、モーラである。後に見るように、語幹に H アクセントがある場合には音節が単位であると考えられるとの対立している。これは語尾が本来複数の形態素から構成されていること、下の例だと-áa 語尾は-á と-a に、-áy 語尾は-á と-i(=-y)に分析されることを、更には具体形の方が非具体

形よりも新しい形であることを示唆する。そして、アクセントを担う単位が本来音節であったことを示唆していると思われる。

(2.1-1)

kan-áa 「犬-M.A.SG.ABS」

kan-áy 「犬-M.A.SG.NOM」

これに対する例外が、男性クラス E、O の非具体形の主格で見られる。

(2.1-2)

har-ée 「驢馬-M.E.NCNCR.NOM」

gaamm-óy 「ライオン-M.O.NCNCR.NOM」

これら是对応する単数具体形とアクセントのみで対立する。

(2.1-3)

har-ée 「驢馬-M.E.SG.NOM」

gaamm-óy 「ライオン-M.O.SG.NOM」

但しこのような微妙な区別、あるいは非具体形の主格は廃れつつあるかと思われる。即ちそれらが予想される場所でも対応する単数具体形が使われることが多い。これを可能にしている要因として、非具体形主格が使われる文脈が実際には少ないことが考えられる。別の要因については第3節で検討する。

このクラスのHアクセントは原則として語尾にあるが、-oo 語尾による非具体形の呼格では、Hアクセントが1つ前の音節に、即ち語幹の最終音節に移動している。

(2.1-4)

kan-áa 「犬-M.A.SG.ABS」

kan-á 「犬-M.A.NCNCR.ABS」

kán-oo 「犬-M.A.NCNCR.VOC」

(2.1-5)

xooss-áa 「神-M.A.SG.ABS」

xooss-á 「神-M.A.NCNCR.ABS」

xóóss-oo 「神-M.A.NCNCR.VOC」

また、複数具体形ではHアクセントがt(複数を表す要素であると思われる)を含むモーラに移動する。音節でなく、モーラという概念を利用しなければならないのは疑問格だけであるが、これも本来は絶対に疑問を表す要素(例えば-i)が附されたものと考えべきかも知れない。但し、-oo 語尾による呼格の場合は例外で、その1つ前の音節(モーラ)に移動する。(2.1-4)や(2.1-5)に見られる呼格語尾も参照されたい¹。

(2.1-6)

kan-áa 「犬-M.A.SG.ABS」

kan-atá 「犬-M.A.PL.ABS」

kan-atée 「犬-M.A.PL.INTER」

kan-átoo 「犬-M.A.PL.VOC」

¹ これらは非具体形の例であるが、非具体性という概念と呼格は何とも合わない。本発表で「単数具体形呼格」とした形も含め、どういう状況で使われるのか、再考が必要である。

以上、纏めると以下のようなものである。

A：普通名詞アクセントクラス I の H アクセントは本来、語幹末子音とそれに後続して名詞の性・クラスを表す短母音から成る音節にある。

B：それに格等を表す要素が付くことが多々あり、その場合、アクセントを担う単位がモーラに見えてしまう。

C：本来の H アクセントの位置は複数を表す要素-t-や呼格を表す要素-oo が現れると移動する。

2.2. アクセントクラス II

原則として、H アクセントを含む音節が語幹に 1 つある。多くの場合、語幹末母音を含む音節である。(2-4)の他、以下を参照されたい。

(2.2-1)

badhdhéés-aa 「種を蒔く季節-M.A.SG.ABS」

badhdhéés-ay 「種を蒔く季節-M.A.SG.NOM」

この H はアクセントクラス I の語尾の H とは異なり、原則として位置を移動しないと考えられる。従って、複数具体形になっても複数を表す要素 t の後ろに H アクセントが移動することはないし、-oo 語尾による呼格形に於いてもその呼格語尾の直前の音節に H アクセントが移動することもない（語幹の H アクセントが元々その位置にある場合は当然そこに現れる。例は(2.2-3)の 1 つ目）。（例外の可能性は後程考える）。

(2.2-2)

maxááf-aa 「本-M.A.SG.ABS」

maxááf-ata 「本-M.A.PL.ABS」

(2.2-3)

kútt-oo 「鶏-M.O.NCNCR.VOC」

kútt-otoo 「鶏-M.O.PL.VOC」

máchch-etoo / máchch-otoo 「妻-F.PL.VOC」

このアクセントクラスの H アクセントは原則として 1 音節分だが、例外的に非具体形主格の場合、この語幹固有の H アクセントに加え、それ以降全てが高く実現されるのが原則であると考えられる。この音調の違いによってのみ、対応する単数具体形と区別されることになる。

(2.2-4)

shódhdh-iyá 「蛙-M.E.SG.ABS」

shódhdh-éé 「蛙-M.E.NCNCR.NOM」

shódhdh-ee 「蛙-M.E.SG.NOM」

但しアクセントクラス I の場合と同様、このような微妙な区別は失われつつあると思われる。即ち、実際に使われる場面が限られている上に、H で実現する音節が幾つも連続する、ウォライタ語の普通名詞としては特殊な発音である非具体形の主格は廃れつつあり、それらが予想される場所でも対応する単数具体形が使われることが多い。

上で見た例の様に、アクセントクラス II の H アクセントは多くの場合、語幹末母音を含む音節にある。但し、例外がある。1 つは派生名詞である。語根語幹に H アクセントがあり、それに H アクセントを持たない派生接尾辞が付いているものである。

派生接尾辞-tett-は語根語幹のアクセントに拘らず、直前の音節に H アクセントが来る。尚、派生された名詞は男性クラス A となる。

(2.2-5)

gitátett-aa 「大きさ-M.A.SG.ABS」 cf. git-áa 「大きい物-M.A.SG.ABS」

lo”ótett-aa 「良さ-M.O.SG.ABS」 cf. ló”-uwa 「良い物-M.O.SG.ABS」

派生接尾辞-ett-は、それ自身 H アクセントを持ち得ず、語根語幹の H アクセントの位置を変えない。従って、語根語幹が H アクセントを有している場合、語幹末音節以前に H アクセントが来ることになる。尚、派生された名詞は男性クラス A となる。

(2.2-6)

dóómett-aa 「始まり-M.A.SG.ABS」 cf. dóómm- 「始める」

zérrett-aa 「種-M.A.SG.ABS」 cf. zér- 「蒔く」

但し

babbett-áa 「恐れ-M.A.SG.ABS」 cf. babb-’ 「恐れる」

語根語幹が確認出来ないが、以下の例から-untt も派生接尾辞と考えて良さそうである。

(2.2-7)

másuntt-aa 「怪我-M.A.SG.ABS」

héqquntt-aa 「しゃっくり-M.A.SG.ABS」

púúluntt-aa 「白髪-M.A.SG.ABS」

zúúzuntt-aa 「ぶつくさ言う声-M.A.SG.ABS」

以下の例から考えて、この派生接尾辞は H アクセントを持つ語根語幹に付く時にはそのアクセントを保ち、H アクセントを持たない語根語幹に付く時にはそれ自身が H アクセントを有する、と考えられる²。

(2.2-8)

agúntt-aa 「棘-M.A.SG.ABS」

gudúntt-aa 「豚-M.A.SG.ABS」

xugúntt-aa 「爪-M.A.SG.ABS」

例が少ないので判断は難しいが、以下も非生産的な and/or 化石的な派生接尾辞を伴っていると考えられる。

(2.2-9)

qán”ish-iyá 「謎々-M.E.SG.ABS」

héxxish-iyá 「くしゃみ-M.E.SG.ABS」

xíitintt-aa 「木炭-M.A.SG.ABS」 cf. bidintt-áa 「灰-M.A.SG.ABS」

áfutt-aa 「涙-M.A.SG.ABS」

óshinchch-aa 「風邪-M.A.SG.ABS」

íirichch-uwa 「(衣類の一種) -M.O.SG.ABS」

² そうした語根語幹は見付かっているが、以下の動詞が存在することを附記しておく。これらは名詞から派生されたものかも知れない。héqquntt-「しゃっくりさせる」、héqqumm-「しゃっくりする」、púúlum-「白髪がある」、zúúzumm-「ぶつくさ言う」。但し、「怪我する」は masunxx-であり、(2.2-8)に関しては関連する動詞が見付かっている。

górjantt-iyá 「食道-M.E.SG.ABS」

もう 1 つ、例外的に H アクセントが語幹末母音を含む音節より前の音節にあるのは、一部の借用語である。

(2.2-10)

átar-aa 「エンドウ豆-M.A.SG.ABS」 cf. アムハラ語 atär、オロモ語 atara
gíbir-aa 「宴会-M.A.SG.ABS」 cf. アムハラ語 gəbər
shúmbbur-aa 「ヒヨコマメ-M.A.SG.ABS」 cf. アムハラ語 šəmbəra、オロモ語 shunburaa

但し、アムハラ語はアクセントの対立を有していないし、Tilahun (1989)による限り、オロモ語のアクセントが反映されている訳でもなさそうである。

こうした例外的な「頭高型」アクセントの語であるが、複数具体形や呼格形に於いても語幹語根の H アクセントの位置はそのまま保たれるらしい。

(2.2-11)

átar-ata 「エンドウ豆-M.A.PL.ABS」
átar-atu 「エンドウ豆-M.A.PL.OBL」
átar-ati 「エンドウ豆-M.A.PL.NOM」
átar-atee 「エンドウ豆-M.A.PL.INTER」
átar-atoó 「エンドウ豆-M.A.PL.VOC」
但し、発表者のデータには以下がある。

(2.2-12)

átar-oo 「エンドウ豆-M.A.NCNCR.VOC」

これは、語根語幹の H アクセントの位置は変わらない、という仮説からすると例外であり、átar-oo の間違いではないかと思われるが、上記各「頭高型」名詞の呼格形が使われる状況は尋常ではなく（複数形も大半はそうだが）、今後も確乎とした結論を得るのは困難かと予想される。

以上、纏めると以下のようなようである。

A：語幹内の 1 音節が高く、その位置は移動しない。

B：H アクセントのある音節は、原則として語幹最終母音を含む音節であるが、派生語や借用語に於いてはそれよりも前の位置にある場合もある。

尚、音声学的な問題であり、音韻論的には上記のように説明すれば充分と思われるが、アクセントクラス II には未解決の問題がある。

1 つは、語頭の H アクセントを有する音節が二重母音や長母音を含んでいる時、1 モーラ目が低く聞こえることがある、ということである。即ち、以下の様な自由変異 (?) が存在する。特に本発表で二重母音としたものは、音声事実を観察し直した上で音節構造を再考する必要があるかも知れない。

(2.2-13)

ééss-aa ~ eéss-aa
áyf-iyá ~ áyf-iyá
láýtt-aa ~ laýtt-aa
shóóshsh-aa ~ shoóshsh-aa
xóóm-aa ~ xoóm-aa
óýtt-aa ~ oýtt-aa
óýss-aa ~ oýss-aa

略号

A (男性名詞クラス A)、ABS (絶対格)、E (男性名詞クラス E)、F (女性)、INTER (疑問格)、M (男性)、NCNCR (非具体形)、NOM (主格)、O (男性名詞クラス O)、OBL (斜格)、PL (複数具体形)、SG (単数具体形)、VOC (呼格)

引用文献

Azeb Amha (1996) Tone-accent and prosodic domains in Wolaitta. *Studies in African Linguistics* 25 (2): 111-138.

Hayward, Richard J. (1994) A preliminary analysis of the behavior of pitch in Gamo. In: Bahru Zewde, Richard Pankhurst, and Taddese Beyene (eds.) *Proceedings of the eleventh international conference of Ethiopian studies, Addis Ababa, April 1-6 1991*, Vol.1. 481-494. Addis Ababa: Institute of Ethiopian Studies.

斎藤純男 (2015) 「アクセント」 斎藤純男・田口善久・西村義樹 (編) 『明解言語学辞典』 3. 東京：三省堂.

Tilahun Gamta (1989) *Oromo-English dictionary*. Addis Ababa: Addis Ababa University Printing Press.

Wakasa, Motomichi (2008) A descriptive study of the modern Wolaytta language. 博士論文、東京大学.